新春雑感

大川創業株式会社
代表取締役会長

大　川　真一郎

明けましておめでとうございます。「光陰矢の如し」一昨年初めてテクノネットに登場して早や3年が経ちます。阪大オペラも昨年15回目をリゴレットで飾れました。工業会の企画会議の席上、当時文化庁所管のコンベションホールに500席あるが、地域の人達に開かれた大阪大学として入場料無料でコンベションホールを満席にしてもらったらホール賃貸料、施設諸費用を無料にしても良いが、大学教授の講演では2、30名しか集まらない。何か良いアイディアがないかと言われ、オペラをやれば500席は埋まりますよと答えて15年も続いている。最初は若手の声楽家に主役の場を与えて、将来日本を代表するオペラ歌手に育って欲しいと新人を登用した。第1回の「フィガロの結婚」ではソプラノの並河寿美は現在東京二期会で活躍中、テナーの清原邦仁は関西歌劇団のトップスターになっているが、成功例は少ない。その成長を待つより観客のレベルが高く、又良い歌手を一人入れるとバランスが悪い。ついついレベルの高い声楽家を登用する傾向にある。さて、昨年の「リゴレット」は過去最高の出来との評価を頂いた。字幕を入れた事も好評だったようだ。ただ文化庁から阪大に移管されると阪大本部はホールと施設使用料を請求するようになった。内輪同士で何故徴収するのだろう。この費用を全額舞台装置に利用できたらコンサート形式でなく本格的なオペラに近づけることができる。工学部の各専攻の中から例えば大道具の代わりに映像でできないか知恵を出してもらえれば阪大がオペラ、ミュージカル界の世界的なリーダーになれるのに。

去年の書き初めは甲午年「工夫と努力で奇跡を生む」と書いた。一昨年秋の春選抜校を決める大阪大会五回戦で履正社に1対13で惨敗した大阪桐蔭の同じナインが一丸となって、どこのチームにも負けない位練習を重ね、昨夏甲子園で奇跡的にも逆転に次ぐ逆転で夏4度目の優勝を果たし、私の作曲した校歌が一番多く6回も甲子園に鳴り響いた！ただ準決勝の日は、阪大コンベンションホールで阪大オペラシリーズ「リゴレット」の本番と重なり、甲子園には行かず、ただ祈り続けた。甲子園で6回闘い4回が逆転勝ち。書き初めの「工夫と努力で奇跡を生む」正にその通りになった。

昨秋は、今年の春選抜出場校を決める大阪大会に優勝した。大阪3校が近畿大会に出場でき、16校中6校以内に残れば大阪桐蔭は夏春連続出場を果たす事になる。昨夏はスター選手が1人もいなくて優勝できた。今年は青柳というスラッガーがいるので楽しみだ。ただ残念な事に大阪大会で3校以内に入れず4位になった大阪産大附属高校の校歌も実は私が作曲している。2校しか作曲していないのに2校共甲子園出場となれば、大変な事になっただろうが、神さんは私の身体の事を考えてくれたのか、大阪産大附属高校は甲子園と祈らずに作曲したので負けたって仕方ないでしょう。

今年は乙未年、安岡正篤先生の著「干支の活学」によれば、甲は「今まで寒さの為に殻を被っていた草木の芽が、その殻を破って頭を出した象形文字。従って春になって草木が殻を破って芽を出すように人間も旧体制の殻を破って創造性を伸ばせとなるが、未だ外の寒気が強くて抵抗が多いために思うように伸びない。失敗する。禍を蒙る。」それが今年乙未年の「乙」はと言うと「去年の甲午で出した芽が未だ外界の抵抗が強い為に真っ直ぐに伸びないで曲折している。だから新しい改革創造の歩を進めるけれども、まだまだ外の抵抗力が強い。しかしいかなる抵抗があっても、どんな紆余曲折を経ても、改革を進めてゆかねばならぬ」という事である。未は「一と木に分解できるが、木の上部、枝葉の繁茂を表す枝葉が繁り過ぎると梢枯れ現象が始まる。天辺から枯れ出す。今年は思い切ってこの枝葉を刈り取り根固めをして採光通風をよくしなければならない。しかし、大きな成果は未だ至らず。つまり、新しい方針、計画を立案し、いざ実行に移しても『乙』は右往左往するばかり、成果は未達である。」だからと言って「果報は寝て待て」と何もしなければ得るものは何も無い。「寝て待て」でなく「練って待て」と試行錯誤を繰り返すと奇跡を生み、果報者になれる。

2014年度のノーベル賞。山中教授の京大から阪大を飛ばして名古屋大、徳島大に輝いた。天野教授は3千回失敗し、次も失敗して低温になってしまって実験したところ、それが成功し快挙に繋がったと言います。小保方さんも頑張ってと言いたい。

話は変わるが、私は一度米国サンディエゴのホートンプラザSCの近くの空地を散歩していると、あちこちで竜巻が発生している場に出くわした。私の背の高さ位のくるくる回っている竜巻の子供は触っても何も感じない。その竜巻が丁度空港で離陸待ちの状態で待機し、次々と一列に並んで出発して行く。その前に掃除機のようなもので吸い取れないものかと思った。当時は竜巻なんか滅多に日本に上陸しなかった頃の話。だが今では真剣に考える価値がある。台風も毎年大型化しているが発生したての小型の時期に台風の目を抜くとか、逆回転させられないものか。

東日本大震災で世界で一番多くの援助金を差し出した国は台湾だという。日本が統治していた頃、台湾に献身的にダムを作った八田与一技師のお陰だ。北京の大気汚染黄砂禍を解決すれば尖閣諸島で日中が険悪な状態に陥る事もない。

ノーベル賞を貰えなくとも、かかる人類を救えたらその方が価値がある。一方イスラム軍にアメリカは一歩も退かず、世界各国に協力を要請しているが、戦う事より人類を災害から守る事の方が大事である。将来ゲーム感覚の若者は戦争に向かうだろうが、若死にしたくない人間同士が戦うとなれば、ロボット戦争になってしまう。となればゲーム感覚の優れた者が勝つだろうが、東大卒の大王製紙の御曹子がラスベガスで大損する事もある。勝者は最後にロボットの数のみで決まるであろう。戦わずして勝つ。やがてベートーヴェンの第九「世界平和と人類愛」の時代がやって来る。戦争で戦死者が出ないと企業の定年制は変わらず続く。早々に退職して人生は一つ。他の生き方をしたいという人は別として、身体はピンピン頭はスッキリ冴え、やる気マンマンなのに定年制というむごい制度の為に定年が来れば働けない。定年後の合言葉「教育と教養」を身につける。つまり「今日行く」処がある。「今日用事」がある事が大切だ。そこで工業会財務改善委員会の立場として、定年後でも働きたい人や企業合理化によるリストラ、配置転換できない人の為に工業会が仕事を斡旋する制度を確立すれば工業会にこぞって入会してくれるであろう。文化庁から国立大学3位の研究費を大阪大学として支給され乍ら、ノーベル賞受賞者はゼロ、研究費を余らせる事をすれば減額必定だろう。ならば特別研究員制度を作り、今回のノーベル物理学賞の赤崎教授と天野研究員の関係のように3千回失敗を繰り返せる研究員は今の若者には少ない。今日行く処がない失業者なら喜んで仕事を続ける事ができるだろう。勿論退職金があるから無給でよい。しかし成果を挙げたら、日亜化学の中村氏のように2万円のボーナスだけでなく成果報酬の8億円位あげるべきだ。かかる特別研究員制度を確立すれば、阪大からノーベル賞受賞者が続出するだろう。教授の助手だけではない。自分の現役時代できなかったテーマで教授会が認めたら、それを成果の挙がるまでやってもよいとなれば、工業会員と大学とがより密接な関係が築かれよう。工業会員になれば老後の心配はない。今日行く処がある程楽しい人生はない。会員になろうと言う声が高まる。ノーベル賞受賞者が出る。メデタシ、メデタシ。

乙未の年は中々成果が挙がり難い年。だからと言って何もしないで人生を無駄に年を過ごしてはならない。色々と考えたり、試行錯誤の実験を繰り返したりする年だから、今年の書き初めは「果報は練って待て」とした。正直者は馬鹿を見ない。努力は必ず報われる。今年はそういう年。来年の申は「伸」つまり「のびる」に通じる。希望の持てる今年一年である。

日本歴史上60年前の乙未年（1955）政治では左右社会党が統一し、日本社会党に自由党と日本民主党が初の単一保守政権、自由民主党が成立し、二大政党となり、所謂55年体制ができた。産業界ではソニーのトランジスターラジオや電気釜が国産初で発売された。野球場・プール・スケート場を有するアメリカ式遊園地が後楽園にできた。経済では高度成長のはしりの年であった。乙未年は事初めの年だと言える。今年からエボラ出血熱、リニア新幹線、HAARP、その他ドゲルバン病、ミトコンドリア、ソマチッド、クラウド型アプリケーション。マグネシウム電池等が紙面を賑わす事になろう。株式は辰巳天井午尻下がりという諺を信じ、私は消費税の上がる前の3月末に全額売ってしまった。午と言えば旧暦なら来年の2月18日迄あるのに少し早まったかと反省しているが、20年間債権王として君臨してきたカリフォルニアに本社を置くビル・グロスが辞任したという。世界大恐慌の予兆か。そうなればいよいよ黄金の国ジパング。日本の時代がやってくる。日本列島周辺には石油に代わるシェールガス、メタンハイドレード、レアメタル、レアアース等が豊富にある。エネルギーを輸入する必要がない。マグネシウムは海水の中にナトリウムの次に多くあるマグネシウムで自動車が動く時代が来るとジャパン・アズNo.1の時代が確実にやってくる。

今年はその第一歩の年である。

（電気　昭和32年卒）